

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 3 日現在

機関番号：26301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07139

研究課題名(和文) ヴァヌアツ未調査言語の数詞と無文字社会における数の記録方法

研究課題名(英文) The Tutuba Numeral System and the Way of Indicating Numbers

研究代表者

内藤 真帆 (NAITO, MAHO)

愛媛県立医療技術大学・保健科学部・講師

研究者番号：00784505

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：南太平洋のヴァヌアツ共和国では、話者およそ500人に無文字言語ツツバ語が用いられている。ツツバ語の2桁の数は、オセアニア祖語や同系統の多くの言語とは異なり、序数を用いてあらわされる。本研究はこの点に着目し、ツツバ語の数詞を中心に年に数度の調査を行った。そして、結婚式や首長任命式などの儀礼においてこうした数え方が用いられること、また儀礼の成功に数に関係することから、ツツバ語の2桁の数が、儀礼文化に呼応して序数を用いる数え方へと変化した可能性、および儀礼がこの数え方を支持した可能性について考察を行った。

研究成果の概要(英文)：More than 100 vernacular languages are spoken on the 83 islands of the Republic of Vanuatu. One of them, the Tutuba language, is spoken by approximately 500 people on Tutuba Island. In this language, numbers over 21 are constructed with cardinal numbers with ordinal numbers. Since this unique counting method over 21 is different from the reconstructed Proto-Oceanic and most other cognate languages, it implies the language change. This study shows how numbers over 21 are used in the rituals or marriage ceremonies on Tutuba Island and explains the possibility that this unique counting over 21 was developed to meet the needs of traditional rituals that require large numbers.

研究分野：言語学

キーワード：ヴァヌアツ 少数言語 危機言語 無文字言語 数詞 儀礼 言語変化

1. 研究開始当初の背景

- (1) 南太平洋のヴァヌアツ共和国は、大小 83 の島々からなり、これらの島では、オーストロネシア語族に属する 100 あまりの固有の言語が話されている。本研究の対象となるツツバ語は、この現地語のひとつであり、ツツバ島でおよそ 500 人から 150 人に話される、無文字言語である。
- (2) ツツバ語の研究は申請者の研究を除くと、1976 年に Tryon らが著した *New Hebrides Languages* に記載されている基礎語彙およそ 300 語のみである。十分に調査がなされずに近隣言語が次々と消滅してゆく中、交通手段のない孤島で話されるツツバ語は固有の言語現象が残存している可能性が高く、緊急に調査されるべき言語であった。
- (3) 申請者はこれまでの調査研究の間、ツツバ語の文法記述を行うと同時に、Tutuba-Bislama-English Dictionary の作成を行ってきた。これはツツバ語とヴァヌアツ共和国の国語かつ 100 あまりの現地語の共通語として機能するビスラマ語、英語の 3 言語辞書である。こうした現在までの調査および辞書作成による語彙の精査から、ツツバ語には祖語とは極めて異なる数え方が存在することが分かってきた。
- (4) 再建されたオセアニア祖語が「10 + 1, 20 + 1」のように加算で数えるところ (Lynch, Ross and Crowley 2002)、ツツバ語では 11 から 19 までは同様に「10 + 1」の数え方であるが、21 以降は基数と序数を組み合わせた複雑な数え方をする。例えば 21 は *gavul-e-rua gavul-e-tol-na e-tea* 「20 30 番目 1」のように基数のみならず序数も用いる。しかし、このようにツツバ語の数え方がオセアニア祖語と異なる理由は不明であった。

2. 研究の目的

- (1) 本研究はヴァヌアツの多くの言語に報告されず、オセアニア祖語とも異なる「基数や序数を組み合わせた数え方」や「葉を用いた数の記録方法」がツツバ語に存在していることに着目する。その上で、ツツバ語の数詞が祖語と異なる要因や、無文字社会における記録発達の可能性を探る。

- (2) さらに北・中央ヴァヌアツに分類される言語を対象に、数に関する調査を行う。そして周辺言語との言語接触の諸相に留意しつつ、これらの特徴を精緻化することを目指す。

3. 研究の方法

- (1) 本研究では、オセアニア諸語のひとつであるツツバ語と、その同族の周辺言語を対象として、数詞に焦点をあてた臨地調査を実施する。
- (2) 再建されたオセアニア祖語と数え方が大きく異なるツツバ語を対象に、差異の生じた 21 以降の数え方に着目して 21 以上の数が用いられる場面、他言語には報告されていない「葉を媒体とする数の記録方法」の詳細について、参与観察と質問紙調査を行う。
- (3) ツツバ島では儀式的成功に数が大きく関わり、数に対する心理的負担が大きいことから、こうした背景のもと数え方が変化した可能性を視野に入れて調査を行う。

4. 研究成果

- (1) ツツバ語の 2 桁の数は、オセアニア祖語や同系統の多くの言語とは異なり、*doman* 「加算」を伴わずに基数と序数を組み合わせた数え方をする。このような数え方となった背景に関しては、これまで仮説も含めて考察がなされておらず、理由は不明であった。本論文ではこのような先行研究の乏しさや研究の余地を踏まえ、ツツバ島での長期の参与観察をもとに、大きな数が使用される場面およびツツバ島の文化と儀礼を調査した。そして、以下の三点を明らかにした。

日常生活において大きな数が用いられる場面は非常に少ない。一方で、儀礼や結婚式において、参加者数を数える時には大きな数が使用される。

首長任命式においては、首長が自身の所有する豚を殺し、その肉を人々にふるまう行為が不可欠とされる。この行為は豚が財産であるこの地において、十分な財力と寛大な心を持った首長に足る人間であることを示す手段であり、儀礼で重要視される。

儀礼の成功のためには、参加者への豚肉の不足を生じさせてはならないという、儀礼や式を主催する側の心理がある。この状況下において、事前に参加者数を数える行為は、豚肉を儀礼に参列した参加者全員に行き渡らせる上で非常に重要である。

- (2) 上記(1)をふまえ、儀礼と数との相関に着目した。そのうえで、この言語が早い段階で「30 40 番目 1」という序数を用いた数え方へと自生的に変化した可能性と 儀礼文化に呼応して数が変化した場合、文化的背景、つまり参加者全員に豚肉が行きわたらせることは儀礼成功のうえで不可欠であるという文化と心理が、序数を用いた一つ上の数え方の合理性を支持し、それゆえに、この数え方が保持されたと考えられることを説明した。
- (3) 儀礼文化に呼応して数え方が変化した可能性については、豚肉の不足を生むと儀礼の成功可否に関わるという心理的負担から、一つ大きな数を基点とする現在の数え方に変化していった可能性があることを説明した。つまり儀礼が人々の心理に影響を及ぼし、それが数え方に反映され、儀礼を経るにつれて広く人々の間に定着したとする可能性である。
- (4) 自生的変化と儀礼文化に呼応した数の変化について、どちらがより妥当であるかの考察を行った。そして数え方の複雑さ、および音声の性質とコミュニケーションの経済性の観点から、後者の妥当性が高いと考えられることを示した。
- (5) マヴェア語やタマンボ語、アラキ語などの周辺言語の臨地調査および文献調査を通して、全く同じではないものの、類似の数え方をする言語があることが判明した。これに関しては、言語接触や同一の言語グループに下位分類される可能性を今後の調査研究で考察する必要がある。
- (6) 本調査研究を行う中で、儀礼に関する語彙がさらに幾つか得られた。これらを現在作成中の辞書項目に加え、資料として発表した。また、色彩用語がピスラマ語から語彙借用されていたことから、これについての論文を発表した。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- (1) 内藤真帆 2016a 「ツツバ語の色彩用語と語彙借用 - ピスラマ語との比較を通して - 」『愛媛県立医療技術大学紀要』第13巻 第1号、1-7頁 [査読有]
- (2) NAITO, Maho. 2016b Nouns in Tutuba Language (A-H). *Bulletin of Ehime Prefectural University of Health Sciences*. Vol. 13.1. pp. 31-35. [査読無]
- (3) 内藤真帆 2017a 「ツツバ語の数詞と儀礼」『愛媛県立医療技術大学紀要』第14巻 第1号、1-6頁 [査読有]
- (4) NAITO, Maho. 2017b Nouns in Tutuba Language (H-M). *Bulletin of Ehime Prefectural University of Health Sciences*. Vol. 14.1. pp. 19-22. [査読無]
- (5) NAITO, Maho. 2017c Nouns in Tutuba Language (M-N). *Bulletin of Ehime Prefectural University of Health Sciences*. Vol. 14.1. pp. 23-26. [査読無]

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

愛媛県立医療技術大学・保健科学部・講師  
内藤 真帆 (NAITO Maho)

研究者番号：00784505

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )